

## 和泉自治会

越前おおの・九頭竜 花桃回廊プロジェクト

### 1 基本データ

○地区名 和泉地区

○地区人口

575人（平成23年6月30日現在）

○面積 332平方キロメートル

○地区の沿革

和泉地区（旧和泉村）は、福井県の東端に位置し岐阜県に境を接し、面積の約3分の2が山林であり、四囲山岳を形成し、その中央を岐阜県境に源を発する九頭竜川が東西に貫流している。また九頭竜川をせきとめた九頭竜ダムを始め、大小複数の人造湖を形成している。



九頭竜ダム湖

人口は昭和40年に5,723人であったが、昭和43年の九頭竜ダム完成や昭和62年の日本亜鉛鉱業中竜鉱山の採掘中止などが影響し平成2年には846人にまで激減した。この人口の絶対数の少なさ、豪雪地帯・山村地域という地理的条件、工業用地条件の欠如による魅力ある職場の少なさ、都市的生活環境整備の立ち遅れ等による若者の不定着により過疎化が進んできた。

このような中、旧和泉村では地域の特性を生

かしたむらづくりの理念のもと観光と農林水産等地域産業の連携による内発的地域振興を目指してきた。特に観光には力を入れ「観光立村」を掲げ、昭和40代後半より多くの観光施設の整備を行ってきた。「九頭竜国民休養地」や「前坂家族旅行村」、「天狗岩ファミリーパーク」などの保養施設やキャンプ場、また「九頭竜スキー場」も整備してきた。さらに平成に入り民間のスキー場（福井和泉スキー場）がオープン、さらに下山地区では、平成元年に試掘された温泉を利用し「九頭竜保養の里」を整備し、日帰り温泉施設、ホテル、コテージなどのリゾートゾーンを形成してきた。

今年で32回目を迎えた「九頭竜紅葉まつり」は、10月に九頭竜国民休養地を会場として行われ、県内でも有数のイベントとして定着し今年度も2日間で約6万人の来場者で賑わった。同会場では5月には「九頭竜新緑まつり」も開催され同じく多くの来場者が訪れている。



九頭竜紅葉まつり

交通網も岐阜県側で国道158号線に繋がる東海北陸自動車道が整備され、中京圏からの距離も短縮され「福井県の東の玄関口」と位置付けられるようになった。

和泉地区は中世から穴馬郷と称せられ、南北朝時代から江戸時代を通じて次々と支配者が変わり、天領として明治時代を迎えている。明治22年町村制実施に伴い上穴馬村、下穴馬村に

分かれ、その後昭和31年9月30日に合併して和泉村となり、さらに昭和34年10月14日に石徹白村の一部を編入した。そして平成の大合併により平成17年11月7日に大野市と合併し現在に至っている。

#### ○実施主体

以前より地区内に、個人で花桃の苗を植樹している方がいたが、ある民放ラジオ局がPRと地域貢献を兼ね、何かしたいということから、地区の方に相談があった。その際に花桃の話が浮上し、企業と地元住民が協力し地域の活性化を目指すべく、花桃の里を作ろうということで話しが進んでいった。

そこで地元の有志を募ることとなったが、個人的にお願いにいくも、なかなか人材が集まらず、自らの手で和泉地域の活性化とコミュニティの形成を図ることを目的とした自治組織「和泉自治会」に話をして賛同を得ることとした。

和泉自治会の賛同も得て、平成21年11月18日に民間企業と地元住民による自主事業団体「越前おおの・九頭竜 花桃回廊実行委員会」が、この地域に花桃の植樹・育成事業を図ることにより、観光文化拠点としての地域づくりに寄与することを目的に発足した。

これらを経て和泉自治会では、平成22年4月27日に長野県上伊那郡阿智村の「花桃の里」への視察研修を実施した。特に月川温泉「野熊の庄 月川」周りの花桃は見事で、多くの観光客が訪れ、イベントも開催されていた。また国道256号線沿いの「花桃街道」にも多くの花桃がみられ、山際や個人宅の庭などにも植栽がみられ、地区全体が花桃で盛り上げようという機運が見受けられた。また、その地区も平成4年にインターチェンジが整備された場所ということもあり、和泉地区と似たような状況にあっ

たため大変参考となった。

このように和泉自治会も実行委員会の目的に賛同し共通認識をもつようになり、実施主体である実行委員会の事業推進に協力をする事となった。



「花桃の里」視察

## 2 現状と課題

和泉地区は、合併後の6年間にも人口が減少しており、731人（平成17年10月）から565人（平成23年10月）へと△166人（△22.7%）となっている。さらに大野市街地から約30kmの距離があり行政サービス低下への懸念や若者の流出により高齢化が進み地域力・マンパワー不足による地域の衰退、経済情勢の悪化による観光客の減など、当地区の将来への不安が増大している。

合併前は小さな自治体であり、昔から電源開発のダム事業や中竜亜鉛鉱業株式会社の鉱山など大きな税収等の恩恵を受け、決め細やかな行政サービスを受けていた。このような状況もあり住民が自ら行動を起こし自らの手で事業を行うという意識が薄く、行政に強く依存している状況であったといえる。

合併を機に、このような状況は一遍し、各種補助金の削減やこれまで無料だった公共水道料金の発生など、少しずつではあるが依存体質から脱却しつつある。

しかしながら、今も自発的に物事を行うことや個人負担を伴うことに戸惑いを感じることもあり、さらに皆を率先していくリーダー的人材が不足している感がある。

### 3 事業実施にあたって

和泉地区は中京方面からの玄関口として、大野市さらには福井県にとっても最重要な地域であり、近い将来の中部縦貫自動車道の開通に伴うインターチェンジの完成などにより交通の拠点となる。



中部縦貫自動車道予定（赤線）

平成21年3月の大野東～和泉 IC 間の新規事業化について、平成23年12月には和泉 IC～油坂峠間の新規事業化が決定するなど着々と開通に向け進展しているところである。

開通に際し、和泉地区が単なる通過ポイントとして埋没することなく、中京方面などから福井県を訪れた方が最初にインターチェンジをおりて立ち寄っていただける「観光拠点」を創造することが重要だと考える。

そこから地域内外の交流が生まれ、地域住民の自発的な意欲・行動が促され、地域力・市民力が向上していくことが期待できる。

その「観光拠点」は和泉地区の自然豊かな風土にマッチした心満たされる場所であり、癒しや休息、おもてなしの優しい心が表現された場所であればいけない。

花木の植樹により花木で育む優しさと癒しを

表す和泉地区ならではの「観光拠点」を創造することのみならず、継続的な育成事業により地域の活力を生む「継続的なふるさとづくり」が可能になる。

福井に入るとき帰るとき必ず立ち寄りたくなる。そんなエリアの創造を目指す。

### 4 事業の内容

- ① 平成22年春より3ヵ年計画（年間500本）にて、和泉地区で花桃の苗木の植樹を行う。
- ② 花桃の育成管理を行う。
- ③ 植樹は広く一般より参加（有料）を求め併せて集客イベントを行い、地元物産のPRや販売の機会を創出する。

### 5 事業の成果

#### ①花桃の植樹

昨年度は、平成22年5月29日（土）30日（日）の両日、同地区の九頭竜保養の里、九頭竜国民休養地、道の駅九頭竜周辺に約460本の「花桃の苗木」を植樹し、県内外より2日間で約1,000人の参加者が集まった。また道の駅周辺や前坂地区、下半原地区、大納地区などへも10本前後の植樹を行い、和泉地区全体で花桃を楽しんで回れるような地域を目指している。

今年度は平成23年5月28日（土）、和泉前坂家族旅行村において植樹イベントを開催し、297名の参加をいただき、約350本の苗木の植樹をおこなった。



イベントステージ

このイベントのほか、実行委員会で川合地区、角野地区、大納地区などへ約150本の植樹を行った。今年度の植樹イベントのPRとしては昨年の参加者へのダイレクトメールのほか、市内外のショッピングセンター等へのチラシの設置、ラジオ番組でのイベント紹介などを行った。参加者は昨年のリピーターが多く約70%を占めた。除々にではあるが、これまで和泉地区へ訪れたことがなかった人たちにも、当地区へ来てみようというきっかけが芽生え始めているように思えた。遊びに來ただけでは、あそこへ行ったことがあるという思い出が残るだけであるが、ここに自分の植えた花桃があるということから、再びこの地を訪れてみようと思う気持ちが生まれ、少しずつ愛着もわいてくるのではないだろうか。



植樹風景

植樹した苗木の添え木にはナンバープレートがついており、自分が植樹した木が分かるようになっている。



設置されているナンバープレート

実際に、昨年は植樹の後もその場所を訪れ、自分の植えた苗木の周りの草刈をする人や、和泉地区の新緑まつりや紅葉まつりに訪れた人が自分の植えた花桃を見て帰ることもあった。一部の苗木には、ちらほらと花がついているものもあり、将来多くの花が咲き誇るよう期待に胸を膨らませていた。

植樹イベント当日は、植樹のあと流木アートやビンゴ大会などで楽しい時間を過ごし、また和泉の食材を生かした昼食も堪能した。今年度は「しし肉のスモーク」「しし汁」「岩魚塩焼き」「舞茸弁当」など、参加者らは植樹と併せ和泉の食材の魅力を存分に満喫していた。

参加者らはこのイベントを通して和泉地区に対する思いを深め、強く心に残る1日になったのではないかと。これにより当地区の魅力が地区外にも発信され、大野市の新たな観光地の創造に手ごたえを感じた。

### 和泉の食材を生かした昼食の提供



しし肉のスマーク



岩魚の塩焼き

### ②花桃の育成管理

草刈、追肥、雪囲いなど植樹後の管理も非常に大切であり、実行委員会のメンバーやボランティアを募集するなどして随時行ってきた。

雪解け後の4月23日には、昨年植樹し、秋に雪囲いをした花桃の雪囲いの取り外し作業を行った。36名の参加があり豪雪にも負けず無事冬を越せた苗木に一安心し、更なる成長を願い追肥も行った。また8月1日には、生育調査と消毒を行い苗木の状況を確認した。11月5日(土)には37名の協力を得て、来たる冬の雪に備え苗木が雪で折れないよう雪囲い作業を行った。参加者らは専門家の指導を仰ぎ、竹と荒縄を使って雪囲いを設置した。昨年も同作業を行った方が多く、2年目ということで昨年よ

り皆手際よく作業を進めていた。特に荒縄で枝を束ねて縛る際の結び方「男結び」にも慣れてきており、すばやく作業を進めていた。本数が多くかなり大変ではあったが、参加者らは一本も雪に負けて折れたりしないよう丁寧に作業を行い、将来この地域が花桃でいっぱいになり、多く方がこの地を訪れてもらえることに思いをはせていた。



雪囲い作業

これらの作業を行うにあたっては、苗木の本数も多く実行委員会のメンバーだけでは実施が困難であり、造園業者などに依頼する資金もないという理由もあるが、この管理を通じて地域の活性化に繋がっていくことを期待し、ボランティアの花桃管理グループ「花桃ガーディアンズ」を募集して行っている。

和泉地区の住民だけでなく、地区外より多くのボランティアを募集することで、多くの方に和泉地区を知ってもらい愛着が生まれる。さらに地元住民と触れ合う機会を創出することが大切であると考えた。

実際、ボランティアには和泉地区以外の参加者が多く、地元の方や初めてお会いした方なども協力して作業を行い、おしゃべりから小さな交流が生まれていた。

これを機に地元住民の交友範囲も広がり、さらに外部の情報を得ることや地域外の人の意見

を聞く事で、今後の地域の発展また地域住民の意識改革に繋がってくるのではないかと感じとれた。

今年度も昨年ほどではないが、かなり雪が多く、花桃の苗はほとんど見えず雪囲いの支柱の竹が雪の上に見えているという状態である。



雪の中の苗木の様子

## 6 今後の展望

花桃の見頃は5月であり、開花から約2週間花を楽しむ事ができる。この3年間で和泉地区の広範囲に植樹を行うが、和泉地区内でも標高差がかなりあり、標高の低い場所から咲き始め、順次標高の高い場所へと開花が進んでいくため、より長く花を楽しむことができるようになる。

当地域は福井県の東の玄関口として、福井県に訪れた際、和泉地区のインターチェンジで降りたくなる魅力ある地域となり、花桃回廊目的の観光客が増加していく。また植樹参加者が当地区に愛着をもちリピーターとなって訪れるようになる。これらにより地区内での消費額も増加し、地域の産業・経済の活性化が図られる。

さらに、ボランティア団体「花桃ガーディアンズ」が花桃の育成管理を継続していく中で、その活動を通じて新たな交流やこれまで以上の深い絆が芽生え、また和泉地区の知名度が上がることにより人々の意識も変わり、地域の活力を生み出す原動力となり、より活発に・より自

発的に地域づくりに取り組む人々の輪が広がっていく。

## 7 地域力向上へ

平成17年の合併に伴い地区住民の間では、行政サービスの低下が懸念されている。これまで小さな自治体のため行政を身近に感じ頼りすぎている部分もあったと思うが、すぐに考え方を変えることは難しい。

この事業が行政に頼らず自主的に地域づくりに携わっていくという意識改革への転機になることを期待したい。

その結果、地域にリーダー的存在の人物が発生し、そこへ自然と人が集まり結束し、地域を牽引する大きな力へと変わっていく。すなわち地域力が向上していくことに繋がってくるものと確信している。